

看護学と大学教育

Nursing and University Education

杉下 知子

I. はじめに

三重県立看護大学の杉下です。本日、三重県立看護大学開学十周年の記念講演会の演者として、ご指名頂きまして、大変光栄に存じております。講演の内容を、どのようなものにしようかと考えてまいりましたが、学生の皆さんに語りかける機会がなかなかございませんので、学生の皆さんにお話しさせていただくということを中心と致しました。ここは大学ですので、大学の話を中心に述べます。その点をご了解頂きたいと思います。また、資料等を作成するにあたりまして、看護の歴史的なところを、何点か検索して用意したのですが、十分に整ってない記述やデータがあるかと思いますが、どうぞお許しいただきたくお願い致します。

本日は、このように大勢の方に、私の講演にお集まりいただきましたことを深く感謝申し上げます。本当にありがとうございます。それではこれから、「看護学と大学教育」というタイトルで、お話をさせていただきますと思います。どうぞよろしくお願い致します。

最初に、数年前私が前任校で看護の教育を学生さんたちと、苦しくもあり楽しくもあるという形で過ごしてきた中から、何点か拾い出したものを紹介致します。看護は、私たちが誕生してから、高齢期に至るまで、その人たちが「病とともに過ごす」あるいは「健やかに過ごす」中で必要なケアを実践活動として展開している学問です。

さて、本日の講演の内容は、4点あります。1点目は、我が国の看護学教育の歴史を振り返ってみます。2点目は、学問についての私見を述べさせていただきます。3点目は、欧米での看護学の発展はどうであったか、日本の看護学の発展を考える上で大変参考になるので少し紹介致します。4点目は、次の世代の看護職、すなわち学生の皆さんへ、私からの提案をさせていただきます。そして最後には、昨年（2005年）の6

月に国際家族看護学会賞を思いがけずに受賞する機会に恵まれたので、国際学会の雰囲気や学生さんにも伝えさせていただけたらと思います、その授賞式のビデオをご紹介して終わりにしたいと思います。

II. 我が国の看護学教育の歴史

1点目は我が国の看護学教育の歴史です。

我が国での近代看護教育の始まりは、1885年に有志教育東京病院看護婦教育所から始まったと考えてよいと思われます。後の慈恵看護専門学校です。その後、1890年に日赤看護婦養成所が発足し看護の学校としての教育枠組みが整う段階となりました。ナイチンゲールスクールが開設された1880年と比較しても日本の看護の教育プログラムのスタートは、ほぼ同時期であることがわかります。

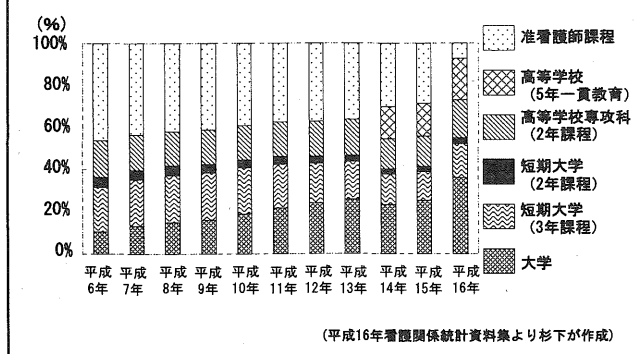
看護教育の体制が全国的に整うのが、内務省令で看護婦規則が制定された1915年でした。この制定のもとに全国的な看護教育の水準が整う段階に至りました。1933年には日赤の看護婦養成所の入学資格を高等女学校とする、つまり、基礎学力をある一定水準に維持するということを検討し、そのような規定を設けたところが特筆される点です。戦後の教育の取り組みの状況

図1 専門学校レベルの看護教育の発足

- 1915年 内務省令 看護婦規則制定(～1947)
- 1920年 聖路加国際病院付属高等看護婦学校
- 1933年 日赤社の看護婦養成所の入学資格を高等女学校卒とする

(看護学生のための日本看護史より抜粋)

図2 現在の看護学教育
看護師・准看護師課程学校割合の推移



等について、アウトラインを図1に示しました。

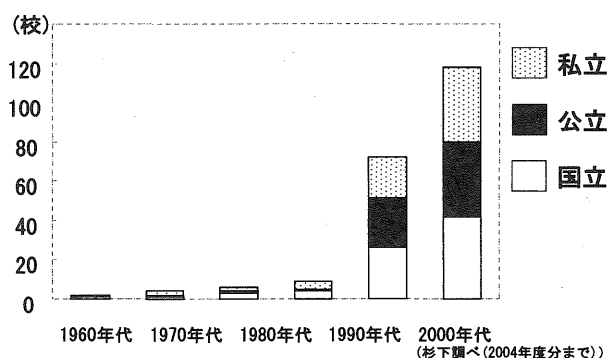
1947年、第二次大戦後には聖路加国際病院附属高等看護婦学校と日本赤十字看護婦養成所がGHQの指導で合流して、看護教育の師範学校という教育プログラムが発足しました。同年に、保健婦・助産婦・看護婦養成所規則を整えるとともに、国立病院療養所（国立の医療機関）に附属の看護学校が全国で17校開設されました。この開設された看護学校に入学した学生が卒業した年の1950年に、第1回の統一した国家試験が実施された、という形で看護の教育および資格が整う段階に至ったわけです。そして1952年には高知女子大学家政学部看護学科に4年制の大学教育プログラムが、わが国に初めてスタートしました。その翌年は国立大学として東京大学医学部に衛生看護学科という名称のもとに看護学の4年制の学部教育がスタートしたという新しい時代を迎えたわけです。

看護師、准看護師の養成プログラム数の平成6年から16年までの年次別の設置数割合の推移を図2に表しました。一番下のカラムは、大学の設置割合が近年、急速増えているという状況を示しています。

Ⅲ. 学問についての私見

次に「学問とは」いう形で看護の学術的な部分を紹介します。看護教育という言葉は広く一般に理解されていますが、歴史と対比して考えてみましょう。看護学教育という言葉は、まだまだ、あまり浸透はしていないように思います。これを医学の方を見てみると、医教育という概念で行われたものを医学教育という枠組に転換されたのはいつごろだったのでしょうか。これを参考に考えながら「看護教育」を「看護学教育」

図3 わが国の看護系大学数の推移

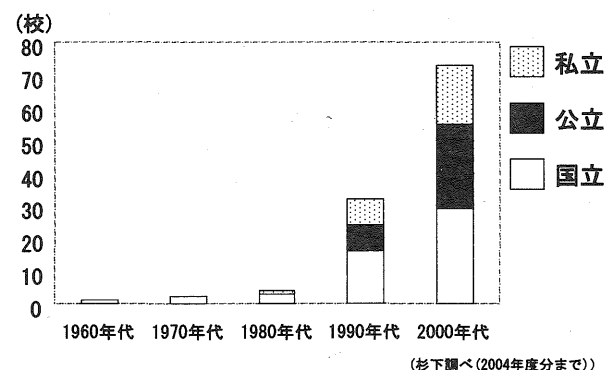


というふうに転換をする要因は何なのか。あるいは、その時点はいつごろであるか。こういったことをしっかり考えつつ私たちは取り組む必要があるのではないかなと思うわけです。

そうは言っても、全体を考えるとということはなかなか困難なので、小さなことから考えてみれば、少しずつ取り組めるのではないかなということから、2点目として少し私見を紹介します。例えば、看護の領域の中でも新しい領域が、ある学術として独立した形で認められるにはどういう基準が必要なのであろうかという点を整理してみました。これが必要十分条件であるとは思いませんが、私が気がついたのは三つほどあります。一つめは、特定の教育プログラムあるいはその大学が開設された日。二つめは、その領域の学術団体の発足や学術雑誌が発刊された日。三つめは、その領域の教科書の初版本が発行された日。この様な時点においてある領域の学術活動や教育活動が始まったと考えてみることができるかと提案させていただきたい。

一つめの「教育プログラムが大学に開設された日」という点に焦点を当て、我が国の看護系大学の教育プ

図4 看護系大学院(修士課程)数の推移



ログラム数が増えてきたのかという状況を示しました(図3)。十年刻みで1960年代、70年代、80年代までは、ここに集まりの学生さんはほとんどご存知ないかもしれませんが、多くの先輩たちが非常な努力をされましたが、なかなか大学教育プログラムは増えてませんでした。そういう大変困難な時代を経て、1990年代に入り、急速に大学教育プログラム数が増加しました。そして、2000年代に入ると、その設置数は120校を超え2006年4月には142校にまで増加しました。今後まだまだ増えると予測されています。ここに示したように私立、公立、国立のほぼ三等分の割合で全国的に整備される状況に至っています。ここに示したのは4年制大学教育のプログラム数、すなわち大学数です。

それでは大学院の設置数はどのように推移してきているのでしょうか。これは修士課程の部分です(図4)。先ほど4年制の学部教育プログラムは120ということを書きましたが、修士の数が2000年代で70校あり、設置主体別の割合でここに示しました。修士のプログラムも大学プログラムが増えたのと同様に1990年代から急速に増えてきています。さらに博士課程も1990年代から2000年代に急速にその教育課程が増えてきました。これは、教育プログラムが充実してくると、それぞれの専門領域の専門性をしっかりと研究し、研究者や教育者を教育していくことの重要性に気付いたことの結果ともいえます。

先程述べた学問がスタートしたと考える基準について、まず、教育プログラムが、どのような状況であるかということを示しました。二つめの点として「学術団体の発足や学術雑誌が発行された日」についてですが、その専門性をより高めていこうという人たちが集まって学術団体を組織し、研鑽を積もうという発想が

でできます。

我が国の主な看護系学会の設立年度をここに示しました(図5)。1967年に日本看護学会が設立されました。これは日本看護協会の中に設立された学会と理解しています。1978年に日本看護研究学会が設立されて、1981年に日本看護科学学会が設立されました。なお1987年、即ち日本看護科学学会が設立されてから6年後に、日本看護科学学会が日本学術会議の登録学術研究団体として第14期の登録学術団体となりました。これは看護系の学会としては画期的なことでした。この当時は、たしか精神医学のなかに登録されたと理解しています。若い学生さんは是非インターネットで日本学術会議のホームページを検索してみてください。学術の組み立てがどのように構成されているかを理解できる便利なホームページが用意されています。内容は少し難しいかもしれませんが関心のある方はチャレンジしてみるとよいです。その後の努力で日本学術会議の19期の看護系学会の登録数は18団体まで伸びてきました。

ところで、日本学術会議に登録という段階までには至らなくても、看護系学会が近年ずいぶん設立されています。これらがいつ頃設立されたものであるかをグラフに示しました(図6)。現在、日本看護系学会協議会という組織が作られています。そこに登録されている学術団体は30団体だと理解していますが、そのうち設立年度が検索できる26学会についてグラフに示しました。これを見て理解できるように1984年までは、極めて少なく2つぐらいでしたが、1995年から1999年の5年間には13学会が設立されました。このように各領域での学術活動というのも活発に展開される状況になってきました。

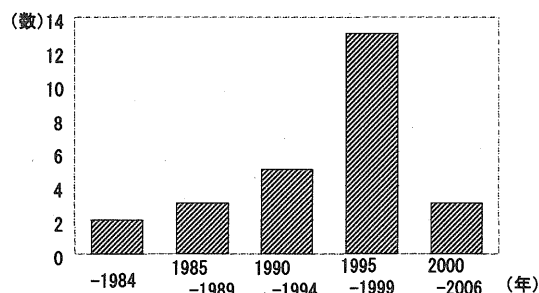
図5 わが国の主な看護系学会の設立年度

1967年 日本看護学会 設立
1978年 日本看護研究学会 設立
1981年 日本看護科学学会 設立
1987年 日本看護科学学会が日本学術会議の登録学術研究団体(第14期)になる

* 日本学術会議第19期の看護系学会の登録数:18団体

(杉下 調べ)

図6 わが国の看護系学会の設立年度



<日本看護系学会協議会加盟のうち、26学会について集計>

次に、我が国で行われた看護学の国際学会を紹介します。その一例として、国際看護学術集会が3年に1回開催されるようになりました。実は国際看護学術集会は、日本の看護学の学術活動の国際交流を図る必要性があるという強い願いから、日本看護科学学会が主体として3年に1度、日本国内で開催するという形で取り組んでいる国際学術集会です。第1回は1992年に東京で樋口康子会長のもとで開催され、以降2004年の第5回（福島）まで開催されています。他の国際学会は、どのように開催されているか検索したところ、国際地域看護学会学術集会の第3回が2005年に東京で開催されました。このときの会長は東京医科歯科大学の島内節先生でした。

次に三つめの「教科書の初版が出版された日」という視点で状況を紹介します。

我が国の主な看護系のテキストの初版出版年という点で整理すると、医学書院がたいへん古い歴史をもっており、「系統看護学講座」が1968年に初版が発行されました。金原出版の「標準看護学講座」は1980年に、朝倉書店の「看護学講座」が1985年に、メヂカルフレンド社の「看護学全書」が1993年に、学習研究社の「看護実践技術」が1995年にそれぞれ初版が発行されました。このように看護系の整った教科書は何種類も発行されてきました。初版出版年でまとめてみると、1990年代に多くが出版されるようになってきました。大学が整ってきたのが1990年代以降であることから、看護の教育的・学術的取り組みが、1990年代以降に活発化しているという状況にあるということが理解できるかと思います。

IV. 欧米での看護学の発展

図7 近代看護のめばえ
～ナイチンゲールの歩み～



3点目に、欧米での看護学の発展状況について少し調べました。我が国の今後の発展に参考にできる部分があるかもしれないので紹介します。ここに示したのは、ナイチンゲールの一般的によく教科書等でみる写真よりも若い頃の写真です（図7）。実は私は、1974年から1976年まで英国のセント・トーマス・ホスピタル・メディカルスクールに留学していました。その当時、非常に立派なナイチンゲールスクールがそこにありました。今のセント・トーマス・ホスピタルは、高層ビルに建て替えられて、それと同時にナイチンゲールスクールは他に移設されてしまったので、残念ながら今はセント・トーマス・ホスピタルに行っても、ナイチンゲールスクールはありません。セント・トーマス・ホスピタルは、ロンドンの中心街に位置し、テムズ川沿いのウェストミンスター寺院と英国議事堂対岸に位置していました。英国議事堂は、よくニュースに出ますが、反対側のセント・トーマス・ホスピタルは、あまりニュースで映らないので残念に思うことが多いです。ロンドンに旅行に行かれる場合には、是非足をのばして、このナイチンゲールスクールが看護の教育の発祥の地ということで訪れてください。そこで出会ったのが、このナイチンゲールの若い時の肖像画です。ナイチンゲールは看護実践を“Notes on Nursing”という本にまとめ、看護を改善した看護の祖と言われている歴史的に重要な人物です。細かい点は省略しますが、ナイチンゲールの特筆する点は、看護の基本である「観察して記録に残す」という作業を根気強く続けたことです。それはクリミア戦争の従軍看護婦として従事した中で行われました。そして、患者の症状を観察し、どういうところで、どういう状態で過ごした場合に命を落とさないですむか、つまり、医療・治療ではなくケアが整う形を用意すれば、死亡率がずいぶん低くなり、生存率がよくなるというデータをつぶさに記録に残して、そのデータをもとに、今で言うエビデンスに基づく形で示しました。これが、イギリスの政府に強い感銘を与えることになり、看護の教育が重要あることを印象づけました。そして、それをまとめものが世界的に翻訳された「看護覚え書き」という本となりました。日本語では「看護覚え書き」という書名になりましたが、オリジナルのタイトルは“Notes on Nursing”です。とても簡潔に記述されていますので、皆さんも、できたら原書で読むと良いと

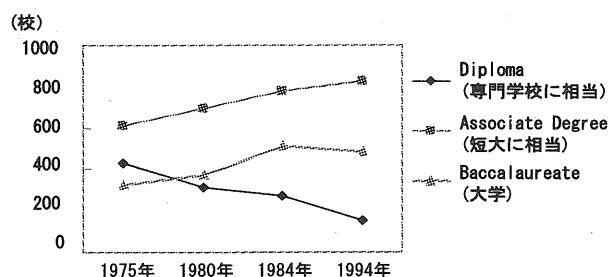
思います。そして、教育の重要性もこの中で示されており、ナイチンゲール方式の教育も確立されました。同時に、記述の仕方に統計的な手法が用いられ、ナイチンゲールは統計学者としても評価されています。

次にアメリカの看護の歴史について何点か紹介します。アメリカでは1872年に、ニューイングランドに小児病院看護学校が設立されました。大学教育は、1910年にミネソタ州立大学看護学部が創設され、翌年の1911年にアメリカ看護協会が設立されました。1955年には「Nursing Research」が発刊されました。この雑誌が初の看護研究の国際的な雑誌として発刊されたということになります。1972年の段階で大学課程の卒業生数が、病院附属看護学校の教育修了者の免許獲得数を上回りました。つまり、大学課程（70％）が、ずいぶん増えてきた状況となりました。

1960年代頃から、アメリカでは多様な実践活動の取り組みということも模索され、ナースプラクティショナー（NP）、クリニカルナース・スペシャリスト（CNS）という、より高度な専門性を持つナースの活躍の場が出現してきました。そして、看護学の教育の中においても、アメリカという国は、たいへん多様化した取り組みをすぐに実現できる形を用意しました。大学院の修士あるいは博士の教育プログラムを行う大学には、修士課程に直接入学できるプログラムがあります。すなわち、学士を持っているが看護師免許を持たない者が、看護の修士のプログラムに入学することができます。そこで、修士号を与えると同時に看護師の資格も与えるという実質的なプログラムなども用意して看護の基礎力の向上に努めています。

看護師を養成するためのコースとして、1975年から1994年までの米国における看護教育プログラム変遷を

図8 米国における看護師免許(RN)を取得するためのコース数の推移



(看護学生のための世界看護史より抜粋し杉下がグラフを作成)

みると、図8に示すように専門学校に相当するコースは徐々に減り、大学のプログラムが増えてきています。大学院の数は、修士、博士コース別に1992年頃には修士コースが240プログラムほど用意されました。スクール・オブ・ナーシングという形で大学院大学化している看護の教育プログラムが大変多く用意されているということがわかります。

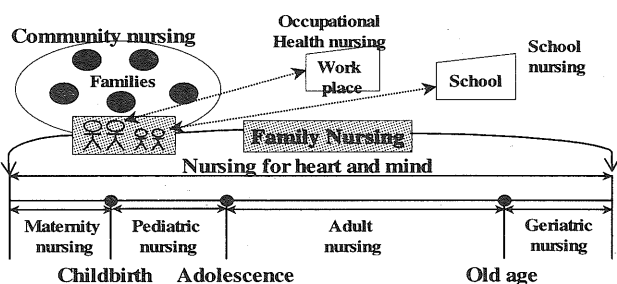
V. 次世代の看護職者への提案

4点目は、次の世代の看護職の皆さんへ提言させていただきたいと思います。

私の実践活動の一つの例を紹介します。私はここ3年間厚生労働省の科研で「地域で生活する障害者の自律生活」（自律；autonomy）を支援する看護プログラムの開発研究を行っています。すなわち居住型モデルの開発実践という研究に従事しています。これは、そのプログラムでは知的障害をもつ子供に、長期間ではなく3～4日間モデル的に生活の場を用意して、そこで自分で生活を見いだせるようするには、看護職としてどのようなサポートが必要であるかという課題に取り組んでいます。

今、政策的にも早期退院すなわち入院期間の短縮、そして地域で生活しながら医療が受けられる体制を整えるという動きが強く進んでいます。この考え方の基盤には、おそらく今までの医療の中にはなかった「生活概念」「生活者の概念」が入り込んできているのではないかと私は考えています。その概念を取り入れた看護の領域として、「家族看護学」という領域があります。私は、家族看護は、どのような内容であろうかと強い関心を持ち学術的な基盤を整える活動をした

図9 家族看護学とは？



*Sugishita, C. (1999). Development of family nursing in Japan – present and future perspectives. Journal of Family Nursing, 5(2), 239-244.

と思っています。ここに示した図9は、"Journal of Family Nursing" に示した、私の知見として出した図です。出生前から高齢期に至るまで、職場や学校や社会との交流を持ちつつも生活の場は家族が中心です。ようするに病院や施設における看護とは違う視点というものが出てくるのではないかという考え方です。

家族看護関係の動きについて少し紹介します。1992年に「家族看護学講座」という講座が千葉大学と東京大学に同時に開設されました。そして、私は1994年に「日本家族看護学会」を多くの賛同者とともに創設いたしました。翌年、学術雑誌「家族看護学研究」が創刊されました。2000年には、教科書「家族看護学」が発行されました。このように「家族看護学」はたいへん新しい段階の学問です。これは第3回の日本家族看護学会学術集会のスナップ写真です（図10）。機関誌の「家族看護学研究」は1995年に創刊されました。ちなみに、"Journal of Family Nursing" は、Internationalの家族看護の雑誌ですが、その発行は1995年でした。海外と比べて遜色のない時点に国内で発行できていたことについて先頃、気がつきました。家族看護の国際学術集会（International Family Nursing Conference）の第1回は1988年にカナダのカルガリーで開催され、第7回は2006年にカナダのビクトリアで開催されました。"Journal of Family Nursing" の学術雑誌の10周年を記念する年に相当し、ここで私は「第7回国際家族看護学会賞」を受賞しました。

看護学の新しい展開に向けて、これから10年間どのような方向に行くのか十分に考えていかねばなりません。健康障害をもった状態で患者や家族が自律した生活ができるように中心的に支援できる専門職、あるいは患者自身や家族が自ら生活を組み立てられるように

支援できるような専門職として、どこの部分が自分たちの独自活動であるかということを明確化し、いかにこれらを社会に示し、あるいは教育・臨床実践・活動を展開するかが問題となるでしょう。「看護学の立場」で、患者自身が「自分が病気を持っている」状態をいかにして理解し、「病気を持っている」「障害を持っている」状態で生活を組み立てていけるようなサポートシステムを用意する。色々な能力を持った方がいるわけなので、どのレベルの教育がその方にとって望ましいのか複数用意する。用意されていれば患者自身が必要なものを自分で選んで、組み立てることができるようになる。そういう専門の領域として社会に主張していけば、社会からの支持が得られます。

VI. おわりに

看護は、今までは医療という枠組みの中で発展してきました。それなりに評価はされ、社会からの信頼も得ています。ですが、医療の枠組みを越えた形で他の領域とコミュニケーションをとる、あるいは、普通の方に看護はこういう部分に責任をもって社会的に活躍している領域であることを、誰しも堂々と説明するべきです。このような力を大学の教育プログラムは用意しているはずですが、そのためには色々な学問領域の方法論や知識を身につけ、自分自身の言葉で看護学を語れるように、是非皆さんには成長していただきたく思います。最後に、国際家族看護学会賞の授賞式のビデオをご覧いただき、私の講演を終わりとします。

図10 日本家族看護学会での活動

